西覚寺だより

第十六号

永代経法要のご案内

● 日にち　四月　二十五日　（月）

● 午前の部　午前十時半　～　正午頃

● 午後の部　午後一時半～午後三時半頃

※感染症対策のため「お斎」はありません。

● 内容　・正信偈（行譜）六首引き

・法話

● 法話　小山　興圓　師

真宗大谷派（お東さん）

安城市　野寺本證寺　住職

プロジェクターを使って、

「絵解き法話」をしてくださる予定

● 永代経法要とは

永代経法要とは、亡き人を偲びつつ、亡き人をお救いくださった阿弥陀様の教えが、そしてその教えの道場であるお寺（西覚寺）が、永代に渡り護持されることを願う法要です。

● 持ち物

マスク着用！

お念珠、門徒式章（お持ちの方）、経本、御仏前（受付にお渡し下さい）

どなた様も、みなさま、ぜひお参り下さい!!

最近感じること

テーマ「初七日」

「初七日」。一般的に認識されているのは、「お葬儀が終わり、火葬した後に、葬儀場に戻り勤める法要」だと思います。

その「初七日」を、「式中初七日」とそれらしい名前をつけて、「葬儀・告別式」と併せて勤めてしまう、つまり、火葬する前に勤めてしまう「プラン」が、最近流行ってきたようです。

私もよく耳にするようになってきました。基本的には、葬儀社さんから「最近はそういう勤め方もある」とかなんとか提案されるそうです。一見すると、これはちょっと魅かれるプランかもしれません。たしかに、①面倒が減る、②金銭的負担が減るという面では魅力を感じるかもしれません。

ただ、私は、「これは違う」と思います。

そもそも何事にも、「順序」があります。その「順序」をむちゃくちゃにしてはいけない。

「お葬儀」←「火葬」←「収骨」←「還骨」←「初七日」←（続）

昔は、葬儀の段取りや火葬にも時間がかかり、実際に還骨のタイミングがほぼ初七日の日に近いため、「還骨」と「初七日」を併せて勤めるという慣例になっています。その「初七日」が、火葬も収骨も還骨も飛び越して、葬儀と併せて勤めるのは、度を越していると思います。

そして、もっと本質的なことを考えなければいけません。

さまざまな法要は全て、「そのタイミングで勤めること」に意味があるのだと思います。その時、その縁の中で感じる思いは、皆さまそれぞれに違うのではないでしょうか。「名目・題目」が大事なのではなく、「タイミング・その時のご縁」が大切なんだと思います。

「初七日法要」とはそもそも、「御命日から七日目のお勤め」という意味です。つまり、そのタイミングで勤めるとこに意味があるのです。式中にやったところで、それは「やっていないのと同じ」だと私は思います。

「式中初七日」ができるなら、「式中一周忌」もできる。極論かもしれませんが、道理は同じです。みなさん、本当にそれでいいのでしょうか。

世の中にはこの流れに乗っかるお坊さんもいます。それは、お坊さんとしても、式中だろうが初七日は勤めたのだから、御布施も減らない反面、時間の拘束が減るなんて助かる、というビジネス的感覚なのかもしれません。それこそ、世の中の人が嫌う、「生臭坊主」ではないでしょうか。

もちろん、様々な事情で、初七日を火葬の後に勤めることができない、そういう方もいらっしゃると思います。私も無理強いをするつもりはありませんので、まずはご相談ください。

いま一度、大切な事は何なのか、改めて考えてみませんか？